

奪われたものは 人生そのもの

梅本 美有



壊れいく日常

1回目（中学3年生）のHPVワクチン接種後もかすかな違和感があったが、それがワクチンと関連するななど思いもよらなかった。高校入学後すぐに3回目接種の「お知らせ」があり、何の疑問も持たずに接種した。副反応症状が出てからのこの14年間、痛みを感じない日はほぼない。朝目が覚めたらまず、身体のどこかが痛く、血液が鉛となったかのような重だるさを感じながら起き上がる。もちろん、そんな倦怠感や頭痛が酷くて起き上がれない日もある。吐き気がしたり、めまいがしたり、痙攣が続いたり。数えきれないほどの症状のせいで、しなければならないこと、やりたいことを阻害される日常が今ではもう当たり前となってしまった。

28歳となった今、人生の半分は症状に苦しむ日々で、もう健康だった時の痛みのない身体を思い出すことはできない。まともに働けず、月のうち1週間以上は体調が悪く家から出ることもできない。

将来は大学に進み、一人暮らしをして保育士として働いて自立した生活を送るんだろうと当たり前のようには考えていた。けれどHPVワクチンがそんな私の夢を、将来を、全てを、奪っていった。

それまで生きてきた中で感じたことのない耐え難い痛みや吐き気、倦怠感に動悸。中学時代はほとんど休んだことはなかったが、高校では欠席が増え、ついには朝起き上がることができなくなり、通うことさえ難しくなっていた。それでも「友だちに会いたい、学校に行きたい」と必死だった私は、文字通り這うようにして1時間以上かけて起き上がり、母の手を借りながら制服に着替え、学校まで車で送ってもらって授業を受けていた。頭が痛くて倦怠感で座っているのもしんどい授業中、耐えられない吐き気で何度もトイレに駆け込み、便器に顔を突っ込んでえづいていた。

さすがにおかしい、私の身体の中で何か異常なことが起こっている、と疑い始めた。私はいくつかの病院へ行った。しかし、どこも「何か学校で嫌なことで

もあった？」「症状が出ているのは気のせい」と言う。私の壊れていく身体に真剣に向き合おうとする医師はいなかった。身体の不調は病院に行けば治療してくれると思っていた「常識」がガラガラと崩壊していった。

学校に行きたい

1日さえも学校にいられることがなく、遅刻・早退・欠席が続き、徐々に通えなくなっていく私に、学校が何か支援をしてくれることはなかった。それどころか、私と母を呼び出して「このまま進級できたとしても卒業するのは難しいんじゃないか」と切り捨ててきたのだ。課題もほとんど忘れたことがなく、成績も悪くはない、割と真面目な生徒だったと思う。

校長の裁量で保健室登校やレポート提出などで単位を取得することは可能であったはずだ（当時はオンライン授業などなかった）。しかし、高校側は、母が何度も足を運んで学業を続けたいと願っても受け入れることはなかった。

このまま通いたい、みんなと卒業したい、そんな気持ちでいっぱいだったが、私の身体はとっくに限界を迎えていた。立っているのも精一杯で涙を流す余裕もない私は、泣いている友人に別れを告げ、単位制高校への転学を決めた。自室のベッドに横になって起き上がれない私に、母が「もう要らないね」と声をかけて、それまで使っていた制服や学校鞆を黒いゴミ袋に詰めた。母の顔は見えなかった。

転学先は体調を理解し配慮してくれて、週2、3日ほど昼から登校してレポート提出で単位を取得できた。当時の私は、光過敏と全身の痛み、ふらつき、吐き気、倦怠感の症状が特に酷かった。家から最寄り駅までの800mほどを、サングラスをかけて杖をつきながら30分以上かけてゆっくり歩いていた。ある時、調子がよくてサングラスを持たずに登校した。数時間後に室内の光があまりにも痛く感じ始め、目をギュッと閉じて机に突っ伏し、友だちに千円札を渡した。「お願い、これでサングラスを買ってきて」

こんなふうによくの症状は1日の中でも強くなったり、弱くなったりと変化しているので、私自身でも全く予想がつかづらい。

箱だけの協力医療機関

転学後に自宅から2時間かけて通っていた「協力医療機関：註」でさえ、全く効かない痛み止めを処方するだけの治療しかしてくれなかった。

ある日、腰から腹部にかけて息ができないほどの激痛が続き、近くの総合病院に救急搬送された。仕事場から駆けつけた母が医師に「HPV ワクチンの副反応でずっと身体が痛い」と説明すると、医師は「痛み止めの点滴が終わったら帰ってください」と冷たく言い放ったそうだ。10代の少女がもがき苦しんでいる原因を追求することもなく。

毎日痛みと倦怠感で苦しみ車椅子で移動する私が、保育士資格を得るための講義になど出れるはずがない。働く以前に希望の進路を目指して受験するという選択肢すら奪われていた。体力がなくて現役で大学受験できなかった私は、一年浪人し、どうにか本来の志望とは別の大学に進学した。車椅子で大学に通う私に周囲はとても親切にしてくれたけれど、卒業まで自分の病気について彼らに話すことはついにできなかった。怖かったのだ。話しても理解してもらえないだろうと。

大学卒業前の春休み、首の酷い痛みで顔を動かすことすらできずに1か月寝たきりだった。長期間続く激しい痛みを少しでも減らせないだろうかと訪れたクリニックの受付で、症状を説明し、予防接種健康被害救済制度の手帳を見せたところ、「診察できません」。苦しむ私の横で、「なんとか少しでも痛みを取れないのでしょうか?」と食い下がる母に、「とりあえず診察します」と言ってくれたが、結局、そのクリニックでは痛みを取り除くことは無理だからと、近くの「協力医療機関」に電話をしてもらった。だが、そこでも「診ることはできない」との回答だった。「協力医療機関」は全くと言っていいほど機能しておらず、ただ箱が存在するだけで、もちろん現在もその状況は全く変わっていない。

就職するも1年8か月で退職

卒業後は、一般の仕事が体調的に難しいだろうとい

うことで障がい者枠で地元の市役所を受け、区役所の窓口業務を担当することになった。わからないことだらけだったが職場の先輩たちはとても親切に仕事を教えてくれて、日に日に仕事に慣れていった。しかし、私の体力は限界だった。業務中に痛みが急に強くなったり、倦怠感で倒れそうになりながら早退や欠勤を繰り返した。入職してからわずか半年で病休・休職となり、鹿児島大学病院（後述）で再び治療をして半年後に復職したものの、働いているうちに体調はどんどん悪化した。ある日、業務中に痛みで涙が出て動けずにいると上司にとっても心配され、負担が少なくなるようにと出社時間を一時間ずらしてもらうことなどもあった。

私の身体は悲鳴をあげており、働きたいという強い想いと葛藤の中、泣く泣く1年と8か月で退職した。友人たちは社会人6年目となった現在、私は障がい者A型作業所の在宅勤務で月10日～16日程度のシフトで働くことしかできていない。

心ある医療者と傍観者たち

大学1年生の頃に同じ症状で苦しむ被害者から、副反応の治療をしてくれているからと鹿児島大学病院の紹介を受けて検査入院したところ、脳に炎症が見つかった。「一緒に治療していきましょう」。初めてだった。冷酷に切り捨てられることなく、分からないから何もできないと放置されることなく、寄り添っていかうとする主治医のその言葉を聞いた時、どれほど心強かったか。

この時すでに3回目の接種から4年が経過していた。

私の住む福岡から鹿児島大学病院までは片道約330km。ぶっ通しで車で行ったとしても5時間以上はかかる。当時は睡眠障害が酷く朝方の活動ができなかったことと、母も私のために仕事を辞めたことから我が家は経済的な負担もあり、親子二人自家用車で通院していた。家を出るのは夜中前。座席を倒して積み込まれた布団にくるまる具合が悪い私と一緒に、母は真っ暗な高速を運転していた。朝方、目が覚めるのは桜島ICか鹿児島市内に入ってから。

今まで6回入院して、5回免疫吸着療法を行った。多くの被害者たちが全国から集まり入院していた。なぜなら当時すでに全国に80以上の「協力医療機関」

註：厚生労働省の協力医療機関リストによると「診療する」医療機関は全国で95（2025年1月22日現在）。

が設置されていたが、それら機関のどこへ行っても取り合ってくれないし治療もできなかったからだ。それほどに、日本全国で、HPV ワクチン副反応を診てくれる病院は極端に少ないのだ。

高嶋博氏（鹿児島大学医学部脳神経内科教授）は法廷で「治してあげたい、国も医者も学会も勧めておきながら副反応が出たら知らんぷり。それはあまりにもかわいそう。変えるのは司法の力しかない」と力強く証言し、法廷で割れんばかりの拍手が巻き起こった。

しかし、そうやって必死に私たち被害者の診療・治療にあたってくれている主治医を口汚く攻撃する人間がいる。HPV ワクチンを熱烈に推進する医師たちだ。医師でありながら、「死ぬ」という言葉を使って、誹謗中傷する姿はあまりにもおぞましかった。

だが、それよりも怖かったのは、そんな医師の投稿を賞賛する医療関係者や一般の人が多かったこと。彼らはワクチンを勧めるだけ勧めて、副反応を絶対に認めない。自分たちが診察をしたわけでもないのに「心因性」という言葉で誤魔化し、副反応と向き合うことは決してない。それどころか、国を信じて接種した私たちや、子どものことを思って接種させた親をも攻撃する。

「お前たちが騒ぐせいで子宮頸がんが死ぬ人が増える」と言われたときには呆気に取られ笑ってしまった。ワクチンを打って被害に遭い、治してほしい、助けてほしい、そう訴えるだけで、言葉にするのも憚られるような暴言をいくつも投げつけられてきた。まさか副反応が出ただけで、ここまで批判・非難されるとは思いもしなかった。

新たな被害者との出会い

2023 年 7 月、福岡地方裁判所での傍聴抽選待ちの際、制服を着た女の子を見かけた。その時私は 25 歳。この裁判の原告たちもとうに 20 歳を過ぎていて、傍聴する若い人もほとんどいないことから、やけに制服姿の女の子が目立っていたように思う。裁判後の報告集会で彼女は「今高校 2 年生で、HPV ワクチンを打ってすぐハンマーで殴られたような頭痛や目の焦点が合わないなど、たくさんの症状が出て学校を休学中です」と話した。集会が終わった後、焦点が合わない症状でほとんど目を開けていられなかった彼女に、少しでも安心してほしいと思って声をかけた。

「大丈夫だよ、あなたは早めに治療することができたからきっと良くなるよ」。そう話す私の声には、悔

しさと怒りと申し訳なさが滲んでいた。私自身が被害を受けてからの 10 年間、早く健康な身体を取り戻して暮らしたい、これ以上被害者を出したくないと、必死に自分の被害を訴えていたのに……私の叫びは彼女には届かなかったのだ。また、自分たちと同じような被害者が生まれてしまった。

あまりにも悔しかった。悔しくて辛くて堪らなかった。大丈夫だよ、と彼女の背中をさする私は、涙をこらえようと必死だった。接種勧奨が再開されなければ彼女はワクチンを接種することなく、それまで通り高校に通う日々を送っていたはずなのに。

人間としての尊厳を取り戻すため

薬害は、単なる薬の副作用、ではない。そこに人為的な介入や圧力、隠蔽が加わって起こる人災である。HPV ワクチンの問題は何も解決されていないのに、2022 年、製薬企業の圧力により接種勧奨が再開されてしまい、この間にも多くの新規被害者が出ている。

私たちが奪われたものは健康だけではない。将来であり、家族の生活であり、人生そのものだ。ワクチンの被害を訴えたら人間としての尊厳を傷つけられる。「たとえ被害を受けたとしても、少数派は大人しく受け入れて黙っている」

こんな社会でいいのだろうか？

社会から見捨てられてしまった少数派の一人として、私はみなさんに問いたい。

HPV ワクチンの危険性・副反応の機序など科学的な証拠・証言は十分出し尽くされた。判決は 2027 年 4 月。10 年以上続いた裁判の結果は、世論の声にかかっている。どうか私たちと一緒に声をあげて、応援してほしい。医療によって苦しむ人をこれ以上増やさないためにも、大人のせいで犠牲になる子どもを減らすためにも。

梅本美有（うめもと みゆう）

1998 年、福岡県生まれ。

中学三年生から高校一年生の間にガーダシルを 3 回接種。その後、身体中の激しい痛みや倦怠感・吐き気、光過敏などいくつもの重篤な症状が現れ、日常生活がままならなくなり転学・退職を余儀なくされた。

2016 年、治療法の確立を求め、HPV ワクチン薬害訴訟九州原告となる。

2022 年、HPV ワクチンの本当のことを知ってほしい実行委員会の代表となり、被害の周知と拡大防止を目指して、講演会や SNS などで情報発信に務めている。